

# マダガスカル島のバオバブ —浜名湖花博覧会の展示まで—

## マダガスカル編

蟹江 康光

### ■バオバブ

マダガスカル島西部で聖なる巨木としてうやまわれているバオバブは、2億年前まで存在したゴンドワナ大陸の生き証人である。「星の王子さま」に登場するバオバブは、あまりの大きさと、根が星を突き抜けてしまう恐ろしい木とされている。

バオバブ属 (*Adansonia*) は8種類知られており、うち6種 (もう1種あるかもしれない) はマダガスカルに、残りの2種類がアフリカのサバンナに生えるアフリカバオバブと、オーストラリア北西部に生えるオーストラリアバオバブである。バオバブ街道で有名なマダガスカル西南部のムルンダバにあるのは、ディディエバオバブである。中西部マハジャンガ (マジュンガ) 名物のバオバブは、500年以上前に、アフリカから持ち込まれたものである。1964年、故・近藤典生東京農業大学教授



1994年9月、ムルンダバ近郊のディディエバオバブの群生。現在、このうちの数本は倒れて存在しない。手前のスイレン池は乾燥化して消滅した。

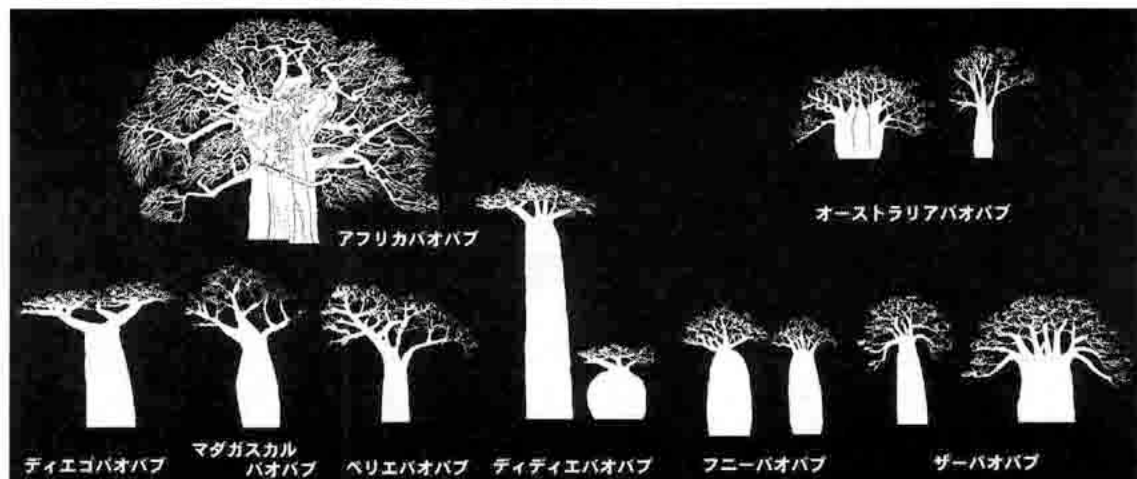
が、日本の研究者としてマダガスカル固有のバオバブを見て以来、本格的な調査が始まり、今ではマダガスカルといえばバオバブと呼ばれるようになった。近年、この巨木も、水田の増加などによる自然環境の変化により、根腐れが進行し、サイクロンなどにより簡単に倒されている。実も種も食用となり、樹皮は建築材になる。若木が少なく、南部では日本のボランティアの手により若木の育成も行われている。2003年9月の聖なる木の自然倒木は、自然からの警告ともいえよう。

### ■私とバオバブ

私は白亜紀と呼ばれる、およそ1億年前の海底に生きていたアンモナイトの研究者で、大学時代から北海道でアンモナイトなどの化石をしらべていた。夢は、あこがれのマダガスカルでアンモナイトの採集と研究、それに恐竜を発掘することであった。その夢が実現したのは、1973年のことで、ムルンダバから約200km北のメナベ地方でアンモナイトの調査を行った。大きな木が林立している場所を何度も通過していたが、それがバオバブ街道とは、知らなかったのである。偶然に首都のアンタナナリブ (当時のタナナリブ) で知り合った吉田彰博士 (農大育種研、今の進化研) は、初めての調査にマダガスカルを訪れていた。そのふたりが20年以上を隔て1994年に進化研所長の故・西田誠博士と共同でマダガスカル白亜紀化石をしらべることとなった。私は、ムルンダバのフィールドでバオバブについて詳しく教えを受け、大きく感銘させられた。

マハジャンガ名物のアフリカバオバブの巨木は、

バオバブの樹形。その姿は、種類によって特徴があり、育つ環境によっても変化する（近藤典生編著 1997 バオバブ：24-25ページを改変。進化生物学研究所・東京農大育種研）



1973年・1975年の恐竜の発掘調査で毎夕のツァンガツァンガ（散歩）で疲れをほぐしてくれる癒しの木でもあった。ここを再び訪れたのは2000年のことで、アンモナイトと恐竜については、別の機会に報告したい。

2003年11月に、私の大学時代の同級生である池谷仙之教授（当時静岡大学理学部）と和田秀樹助教授（静岡大学理学部）が、初めてのマダガスカルでムルンダバの聖なるディディエバオバブの倒木を見て、その興奮を私に伝えてきた。池谷博士は、貝形虫化石の研究者である。浜名湖花博の展示の構想にも携わっておられ、バオバブを花博で見せることを花博の理事者に提案された。紆余曲折の結果、2004年1月末にゴーサインが出た。和田博士は、同位体地質化学が専攻である。展示計画と並行して、バオバブの科学を調べることに、バオバブレスキューの一つとすることになった。私たち、地質学者がバオバブの倒木を扱うきっかけは、ここに始まった。

花博覧会からの依頼は、「直径4.2mの聖なるバオバブの倒木を花博へ運搬して展示したい」とのことである。しかし、博覧会のオープンは2004年4月8日で、搬入まで70日しかない。私が、吉田博士に相談したのは当然である。博士は生きたバオバブを海上コンテナで日本へ運んだことはあるが、倒木運搬の経験はない。花博の特使となった私は2月2日夜にパリへ向かった。出発直前に現地は

サイクロンが荒れ狂い、今、フライトは運休している。12時間後、早朝のパリは氷点下の世界で、ここで乗り換えさらに12時間後、アンタナナリブへ深夜の23時に到着、24時間の飛行であった。その後、カイドのリチャードさんと早朝3時まで打ち合わせて、朝10時50分に出発し、ムルンダバへ12時に到着。パリ経由にしたのは、11日からモロッコでの調査が既に決まっていた、マダガスカル行きを強引に詰めこんだからである。

吉田博士から聞かされたのは、聖なるバオバブを入手するには、現地の習慣や人びとの心情に決して逆らってはならず、儀礼にはお供えの牛が必要になることもあるなど、まったく未経験のことである。それに森林水資源局の現地所長と優秀な現地ガイド、上院議員を紹介して下さった。

## ■ムルンダバで

事前に現地入りして、アレンジしていただく守谷商会の宮崎武信所長・ローラン主任とアリクス（サル）旅行社の黒川廉氏と合流し、ただちにムルンダバ市内に向かった。嵐の後の市街には、いたるところで電柱が折れ、木が倒れていた。バオバブは、側根が少なく、強風には弱い。エリタと命名されたサイクロンは、数日前にムルンダバを直撃していた。3人の説明を受け、5か月前に倒れた聖なるバオバブの搬出は不可能と判断した。そして、運搬用の20フィートコンテナ内部の大き

さが2.2m角、奥行きは2.8mか5.5mなので、このサイクロンで倒されたディディエバオバブの倒木の中から、幹の主要部が15m、直径2.4~2.2mの倒木を運び出す計画に変更し、運び出す樹幹部分の長さは4.4mとした。すべての作業を人力に頼る現場では、この大きさが限界である。また、展示と保存方法の検討のため、樹幹のテストピースを静岡大学に送った。搬出の許可を得るために森林水資源局、翌朝には市長の了解も得られ、私は輸送申請書にサインすることができた。吉田さんのアドバイスが適切であったことに感謝した。幸い、牛のいけにえは必要なくなり、おみやげに用意したお雛様の乾菓子をプレゼントすることにした。この時点で輸送用の樹木切り出しの予定まで詰められた。この経過を花博協会に伝えるのは、携帯電話だけが頼りであったが、時差と日本の休日、容易ではなかった。ローラン氏と黒川氏は、このまま滞在して現地指揮に当たることになり、花博の開幕にギリギリ間に合いそうで安心した。私はさらに詰める必要があったので、15時のフライトでアンタナナリブへ戻った。

### ■サイクロンの跡を見る

次の2日間はマハジャンガでの博物館建設の打ち合わせを行い、建設場所を見に行ったが、マダガスカル第2の稲作地帯の水田は洪水で水没しており、建設予定地は水面下となり、船で行かねばならなかった。学校は避難場所となり、博物館の話は進まなかった。空から見たベテブカ川は、ラテライト土砂の流出で赤い川となり海岸線まで赤く染まり、被害の甚大さを痛感した。サイクロンはこれだけにとどまらず、3月初旬の1週間にわたって「ガフィロル」が島を横断して、さらなる被害を与えた。

### ■首都アンタナナリブで

マダガスカル最後の1日は、午前中がバオバブ搬出手続きで、吉原在マダガスカル全権大使とJICA事務所へお願いの挨拶に行き、快諾していただいた。昼休みに花博事務局とやっと連絡が取れたが、予想外のバオバブ搬出中止の話が出た。



2003年9月に倒れた聖なるバオバブ（ディディエバオバブ）の樹。2004年2月には幹の下部は大きく裂けていた（宮崎武信氏撮影）

午後は地質学者のラスアミアラマナナ教授と打ち合わせし、夕方まで花博事務局からの電話を待たせ、時差の関係で連絡はなかった。昼食・夕食抜き空腹のまま、空港へ。夜食にありつけたのは22時であった。翌10日の午前1時20分発パリ行きに搭乗して、疲れた身体を休ませた。

### ■搬出を再開

モロッコでの調査を終えて、3月25日に帰国した。メールを整理したところ、2月28日発行のバオバブニュース3号で搬出作業が開始されたことを知った。多くの人手と乏しい機械を使用して、切断した2体の幹がコンテナに詰められ、首都に運ばれた。3月1日コンテナから取り出すと、60~80%が水分のバオバブは、輸送中に自重で下部がつぶれ、黒カビを生じていたので、資料の一つは放棄した。

そこで、残った1体の表面を削り、幹の形を保持するために、樹幹をロープで巻いて立てた状態で運搬して、東岸のトアマシナ港に運ばれたのは3月10日であった。この間にすべての準備を終えて、冷蔵コンテナに詰められたバオバブを乗せた船は4月2日に出航したのである。

経過報告の一部は

<http://homepage.mac.com/okinmebis/>に掲載しています。

※本稿後編については、次号でお送りします。

（かにえ やすみつ あーすコンサル

okinmebis@mac.com)